

桜蔭俳話会 九月句会 (第三二八回)

平成二十五年九月二十二日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

【鑑賞】

気がかりな原発汚染穴まどひ

秀一

原発被災による核汚染では、依然として広範な未除染地区が残されている一方、冷却処理水の保管タンクの設計建造時の不手際や点検管理の不備に起因する地下水汚染を招き、地下水の浸透によって海洋汚染まで懸念されている。まさに「気がかりな原発汚染」である。この人間界の不安な事象と、自然界の彷徨っている秋の蛇との取り合わせは上手い。これが多くの賛同者を得た理由であろう。評者も支持した一人である。

ただ、推敲の余地があるとすれば、「気がかり」と「惑ふ」との意味・イメージでの微妙な重なりである。「穴まどひ」は季語として据えたものであるから、これを外せないとすれば、「気がかり」を「惑ふ」とは連想性のないフレーズによって置き換えることになるであろう。

【鑑賞】

バス路線絶えし街道秋あざみ

明美

山間僻地の限界集落だけでなく、平野部でも静かに進行する人口減少によって、どんどんバス路線が廃止に追い込まれている。人が溢れていた町並みや賑わっていた街道を思うとき、その変貌の激しさに一抹の悲しみを感じ、将来に不安を覚える。さびれた街道を見やるように咲く秋菊との対照が上手い。

なお、「絶える」は文語では「絶ゆ」であるから、「絶へし」は「絶えし」となる。

【鑑賞】

名月や雨戸にかける手を止めて

邦子

雨戸を閉めるときに満月が上って来るのに出会い、雨戸を閉める手を止めて、しばし名月の世界に浸ったという句である。俳句は手の込んだ難解な表現にすることもできるが、このように率直で簡明な表現も良い。下五の「て」止め表記は、通常推奨できないが、掲句はぎりぎりセーフであろうか。

【鑑賞】

秋高し動く歩道を駆け抜ける

ヤエ子

以前の句会で真三さんの「風涼し動く歩道の曲り角」という秀句に出会ったが、掲句の作者は「動く歩道を駆け抜けた」のである。エスカレーターでもそうであるが、動く歩道を利用しているとき、ひやりとするのは、脇を駆け抜ける利用者の存在である。本来、危険行為として自粛をアナウンスされているが、おそらくこのときは、他の利用者がいなかったのであろう。晴れわたる青空が人を躍動的にしたのである。その意味で「天高し」の季語が活きていると言える。

【自句自解】

もう怒る相手のをらず秋刀魚焼く

守

怒る相手は家人に限らず、同僚知人の誰でも良いが、人間は人の間と書くように一人では生きられない。互いに気にかける友人知己がいたり、喧嘩相手の仲間が健在だからこそ、生きる張り合いがあるというものである。しかし、だんだん年を重ねるにつれて、仲間が思わぬ重病に罹ったり、不意に世を去ることがある。このときの空虚感と、秋刀魚を焼いているとの日常性との対照を詠んだものである。

#### 【鑑賞と添削】

雑魚を売る声の涼しき若夫婦

幸

「売り声が涼しい」と捉えたのは上手い。ただし、「雑魚を売っている」としたのでは、不漁続きで売り物には雑魚しかないという「うら寂しい情景」になってしまい、掲句の眼目である「声の涼しい」のところまで誘導するには無理がある。

おそらく、売り台には大漁であった一種類の魚がところ狭しと並べられていたのではなく、種類ごとには数は少ないが、その日の網にかかった多種類の魚が並べられていたのであろう。また、売り手を若夫婦に限定することもないのでないか。

とすれば、掲句は次のようにすることができる。

とりどりの魚売りぬし声涼し

#### 【鑑賞】

池の面のさざなみ十月桜かな

清子

俳句雑誌などで良く見かける、観念的な所謂前衛俳句は、何回も読み返し、機智に頼った連想を働かさなければ理解できない。作者と少数の追隨者のみが自己満足的に得心しているだけの、言うならば、「一人だけの世界」に没入しようとする俳句である。

これに比べると、掲句は一読して万人が直ちに理解でき、共感できる俳句である。やはり伝統的な俳句の詠み方には、それ相応のずっしりとした重みがある。十月桜の咲き様、花びらの大きさ、色合いが、深い客観写生を通して、池面のさざなみに投影されている。

#### 【鑑賞】

宵闇を独居の家へ持ち帰る

秀一

「持ち帰る」の表現が上手い。「持ち帰る」という俳句を立てるとき、ともすれば持ち帰る対象をある空間に局所的に存在する具体物に特定して示したいという欲求に駆られる。掲句に関して言えば、「・・・の月」を独りの家に持ち帰る、とするのであろうが、作者はこの常套的な句立てを排し、「宵闇」という空間全体に満ちているものを持ち帰るとした。

宵闇は月が上がる前の闇のことであり、戸外に居る作者とともに「独り居の家」を既に包み込んでおり、わざわざ持ち帰る必要はないように考えられるが、作者があえて「家」に持ち帰ると詠んだのは、戸外において感得した「宵闇」のゆかしさを家に戻っても深く味わいたいということかと思う。「独り居」は作者のこのと

きの孤心のあらわれである。

【鑑賞】

台風圏水の平野となりけり

明美

平野の中心部には河川が貫流している。河川は両岸に沃野を形成し、作物に必要な水の供給源である。しかし過剰の水を供給する台風が居座るとき、河川は氾濫し、沃野はたちまち水の下になる。水の氾濫した平野を「水の平野」と切り取ったのは上手い。

人間は静かに流れる水の恩恵のもとに生かされているが、ひとたび水が暴れると、それまでに築き上げて来た生活基盤をたやすく破壊される。「水の平野」とは、美しくも悲しい表現である。

【自句自解】

鈴虫やヒトいつよりの夜行性

守

縄文や弥生時代にまで遡らずとも、評者の子供時代は遊びほうけても暗くなる前に家に帰っていた。今は朝方まで盛り場を漂流する少年少女がいる。大人も遊興のため夜歩きするだけでなく、経済不況のあおりを受けて残業を余儀なくせられ、また、不規則な深夜労働を強いられている若者たちも多にいる。夜行性は霊長類ヒト科の属性の一つに後天的に組み入れられてしまったのであろうか。それは何時頃からののであろうか。すずやかな虫の音にふとこのような懷疑を覚える。

【添削】

満月や台風一過も知らぬ顔

ツル子

満月も台風一過も季語であるから、どちらかを消すのが望ましい。また、「知らぬ顔」は少し擬人化表現がきついのでもう少し抑制したい。添削の案としては、次のようになる。

満月のひとり耿耿(こうこう)水害地

【鑑賞】

秋蝶の肩に止まりぬ三回忌

友子

「肩に止まりぬ」と言うことによって、亡き人の霊が自分に帰って来てくれたような気がする。故人を偲ぶ回忌の句としては色々あるが、肩に止まった蝶に着眼したのが良い。

【添削】

気短の父への思ひさんま焼く

清子

追想句の場合には、ダイレクトに「思ひ」や「想ひ」という言葉は句に入れない方が良い。添削の案としては、次のようになる。

気短かの父にありけり秋刀魚焼く

【添削】

今日の月心ゆくまで眺めけり

邦子

良夜はまさにこういうものであるから、原句のままでは弱い。作者は橋の上で眺めていることにして具象性を持たせることにすれば、添削の案としては次のようになる。

今日の月心ゆくまで橋の上

【添削】

名月や月餅たべて祝うかな

直子

月祀るの句では、月餅や栗、豆を食べる表現は入れない方がよい。名月の日と退院祝いの日が重なったものとして、次のように添削することができる。

名月や白粥すすり祝ふかな

【添削】

何事も不作なりしや秋湿り

ヤエ子

上五中七がマイナスイメージの事柄であるから、下五は少しでも明る目の季語を置いた方がよい。添削の案としては、次のようになる。

なにもかも不作なりしや花すすき

【鑑賞と添削】

奥院のしづまりかへる白桔梗

友子

静寂になかに立つ奥院と白桔梗の配合が上手い。確かに本院、別院と言うから奥院は【奥院】であろうが、俳句のリズム的には、【奥の院】の方が良いのではないか。どっしりと立っている情景が見えてきて、「しづまる」がより効いて来る。添削案としては、次のようになる。

奥の院しづまりかへり白桔梗

【添削】

今朝の庭つんつんつんと曼珠沙華 ツル子

確かに今朝起きたら庭に曼珠沙華がつんつん出ていたのであるから、【今朝の】庭としたいのであるが、これでは今朝庭に曼珠沙華を発見しましたとの報告の俳句に終わってしまう。

作者が独り住む家に曼珠沙華が訪ねて来てくれたようにしたい。また【と】はリズムの断絶を生じやすいので、なるべく省略したい。添削案としては次のようになる。

独り居の庭へつつん曼珠沙華

【鑑賞】

警報のやみて夜食となりにけり 明美

掲句で使用されている【夜食】は、本来の歳時記にある【夜食】とは使い方が違うのであろうが、洪水警報や洪水警報が解除されたあとの安堵感が、夜食によってよく出ている。

【添削】

冬瓜のごろり置かれしたたきかな ヤエ子

「三和土にごろり置く」の句は既にたくさんあるので。

冬瓜の離れて二本たたきかな

【添削】

咲くを待つ人には遅し菊の花 邦子

言葉を整理すると、添削案としては次のようになる。

咲く前に見罷れし（みまかれし）ひと菊の花

【鑑賞】

イブシロンきれいに揚がり衣被 明美

今回はトラブルなく打ち上げられたイブシロン・ロケットを寿ぐ句である。小ぶりの衣被を皮の上から指先で押したとき、身が皮から飛び出す様子と、今回の小型ロケットの発射とを対照させたものであり、【きれいに揚がり】の措辞が鮮やかである。

【添削】

星の数多くなりしや台風過 ヤエ子

台風一過で澄んだ星空となり、見える星の数が多くなるのは、よく知られていることであるから、切れただけでは俳句として弱い。作者なりの独創性を加えるべきである。たとえば、次のように大胆に飛躍することもできる。

台風過空のカーテン開けにけり

【添削】（夏の句として）

夕焼けの一望の原羊染む 幸

夕焼に羊が染められる風景を詠んだものである。一群の羊たちが一望の原に居ることはわかるので、これらの情報を句に入れる必要はない。添削案としては次のようになる。  
群羊を染め上げてゆく夕焼（ゆやけ）かな

【鑑賞】

特攻の兄弟の碑大西日

幸

特攻による戦死を記す碑と、これを照らす大西日の対照には、圧倒的なものがある。

【添削】

頂上のひかる尾花や下界澄む

友子

頂上のひかる尾花へあと一步

【鑑賞】

潮傷み激しきフェンス秋の蜂

明美

潮に曝される海岸縁の金網フェンスは、年年歳歳衰えていく。冬に備えて飛び回っている秋の蜂がそのフェンスに止まっている。潮傷みと秋の蜂との配合が良い。

【添削】

甲羅ほす亀並びをり台風過

清子

【添削】

十五夜や外人親子に席ゆづる

真三

十五夜や異国に人へ席譲る

【添削】

オリンピック決定歓喜の秋暑し

ツル子

当選の東京五輪涼新た

【添削】

高速をハーレー飛ばす敬老日

ヤエ子

ハーレーを駆りし白髪敬老日

【添削】

猫医院主のなでる手秋湿り

幸

猫町の猫撫でらるる秋日和

【添削】

赤蜻蛉群れし刈り草多きとこ

真三

刈り草の積まれし影へ赤蜻蛉

【添削】

東京オリンピックに翳雲

直子

祝杯の東京五輪いわし雲

【添削】

ダイアナの果てしトンネル秋の闇

ダイアナの果てしトンネル秋の風

【添削】

そちこちに芙蓉咲かせて町ゆかし

清子

そちこちに芙蓉咲かせし町通る

【添削】

星空の今宵スターは望月の月

邦子

もろびとの眼あつめし望の月

【添削】

かなかなの声の途切れて夕支度

ツル子

かなかなの声の途切れし夕支度

【添削】

特養の納涼祭に笑顔売る

直子

特養の納涼祭やまづ笑顔

【添削】

どつしりと芒並びし又会ひぬ

真三

同じ駅同じ町角花芒

【添削】（冬の句として）

出発し同じ秋せきひそやかに

真三

バス発進わが咳に似し咳の人

【添削】

秋空の先につづくやベビーカー

ツル子

天高し隊列五台ベビーカー

【添削】

空蟬を見つける声や寺の庭

幸

空蟬に声のありけり古寺の径

【添削】

甲州路豊年と見ゆ稲の穂に

直子

豊かなる稲穂の波や甲州路

【添削】

天心よりひかり降り来る良夜かな

友子

天心のひかり降り来る良夜かな

（不在投句 古野明美、原田清子、平野邦子）

「事務局よりお知らせ」

① 十月句会は吟行会となります。

・ 期日 十月二十日（日）

・ 場所 こども自然公園（旭区）

詳細は同封の案内をご覧ください。

② 十一月の定例会

・ 日時 十一月二十三日（土） 午後一時三十分

・場所 旭区民文化センター・サンハート  
(相鉄線二俣川駅ライフ五階)

③ 十二月の定例会

- ・日時 十二月二十三日(月)午後一時三十分
- ・場所 旭区民文化センター・サンハート